

『キャラメルの木』 いかがでしたか。これから、おじいさんの子ども時代のお話をします。

私が生まれ育った所は、小谷山という、昔、山城のあった山のふもとです。

私が小学校二年生の時、戦争がはじまり



『キャラメルの木』

上條さなえ／作 小泉み子／絵
講談社

夏休みに初めてきいた戦争のおはなし
「おばあちゃんはね、むかし、うそをついたの」それは戦争中、物がなかった時代のお話。小学生のしんのすけの胸に、おばあちゃんの言葉がコトリと落ちてきました。(出版社HPより)

- 発行: 2004年8月10日
- ページ数: 34ページ
- I S B N: 978-4-06-132299-8

ました。私の父や近所の男たちは、つきつぎと戦争に出て行ってしまいました。そうになると、田や畑で米や野菜を作る人がいなくなり、だから、食べるものがだんだんと少なくなっていました。

そんなとき、子どもたちのおやつなどは、とても手に入りませんでした。

おやつにキャラメルをほしがる病気の弟に、「キャラメルなる木」の夢をあげる優しい姉を描いたこの作品は、本当にあった話のように思えます。

私が子どものころのおやつと言えば、野や山にできる木の実の間でした。キャラメルのようなおやつがあることも知りませんでしたので、「おやつになる木の実」を探して、野や山を駆け回りました。

おなかをすかせた友達と、猿のように木に登り、山や谷を越えて探し求めました。春には、甘酸っぱい野イチゴや、イタドリ、夏には、ブルーベリーのような味のする夏ハゼや、桑の実、秋は、クリやキノコなどを採らばたつぷりと手に入りました。桑の実を食べすぎて、おなかを壊したこともあり

ました。しかし、マツタケなどは秋にたくさんととれて、食卓を賑わせました。冬になると雪がたつぷり降ります。「これが全部お砂糖だったら良いのになあ」と思ったこともありました。

戦争が激しさを増していった4年生のころ、日本中が食料不足になりました。そんな時は、少ない米のご飯に、食べられる木の芽や野草を混ぜ、量を増やしていたきました。やつと畑で採れたお芋や大根が入っていたら、ご馳走のうちでした。その木の芽や野草を採るのは子どもの仕事でした。4年生になった私は、木に登ることも、川で魚を取ることでも大変上手になっていて、家族を喜ばすことができました。

おいしいチョコレートを知ったのは高校生になってからです。はじめて、それを口にしたときは、世界にこんなおいしいおやつがあるのかと、大変驚いたのを思い出します。

今、みなさんのまわりには、おいしいおやつがあふれていますね。世界が戦争をしないで仲良くしようと努力をして、日本で作った食べ物や輸出、外国の食べ物を輸入しているからですね。今、世界が平和であるからできることです。



野山で鍛えた体が今の活動を支えている (筆者)

このあいだ、子どものころに野山をかけずり回った小谷山に登ってきました。そして、450年ほど前にその山城で生まれた「茶々、初、江」という浅井三姉妹の子どもたちも、きっとおじいさんの子どもたちと同じようなものをおやつにしていたのかなと、昔の時代に思いをめぐらせました。

子どものころの野山での活動のお陰で頑丈な体ができたようにも思え、82歳になっても、健やかに過ごしています。